

最新医療紹介

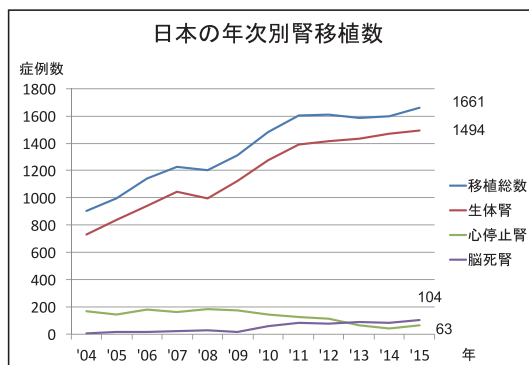
腎臓移植の最近の事情

泌尿器科部長 錦戸 雅春



はじめに

日本の腎臓移植の歴史は50年を超え、現在16,000人以上の方が生着生存して生活され、その数は腹膜透析の患者数を上回っています。2015年日本で1661人の方が腎移植を受けておられます。ただ90%以上が生体腎移植です。最近の事情を2015年の統計も含めてご紹介します。



多様な生体腎移植

生命予後やQOLの観点から維持透析を導入せずに移植する症例が33%に達しています。また24.3%が60歳以上の高齢者であり、ドナーも半数以上が60歳以上です。レシピエントもドナーも70歳代まで可能となり、高齢化の時代を迎えています。ドナーとの関係では夫婦間移植が親子間移植を初めて上回り、37.3%となり、血縁にかかわらず成績も変わりません。また糖尿病患者の腎移植も増加して14%に達しています。ABO血液型不適合移植も約30%に施行されており、成績は適合症例と変わりません。

増えない献腎移植

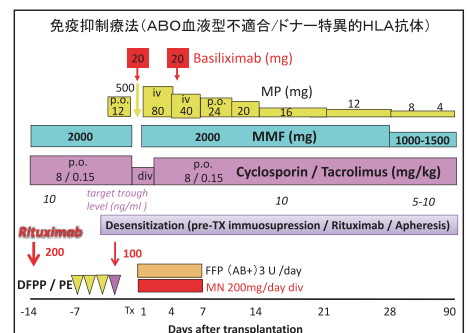
2010年に臓器移植法が改正施行され、家族の同意で脳死状態の臓器提供が可能になり、脳死提供は増加し、腎臓においては脳死提供が心臓死提供を上回るようになりましたが、心臓死提供が減少して、総献腎移植数は増加せず、未だに12,000人の希望登録患者で平均待機年数が14年の状態です。

免疫抑制療法と成績

抗CD25抗体 (Basiliximab)、代謝拮抗剤 Mycophenolate mofetil (MMF) と Calcineurin 阻害剤 (Ciclosporin / Tacrolimus)、steroid を組み合わせたレジメにより、急性 T 細胞性関連拒絶反応は 20% まで低下し、その程度も軽微なものとなりました。5 年生着率も生体腎 96.2%、献腎

移植 91.2% まで改善しています。一方ドナーに対する抗 HLA 抗体関連拒絶反応や CMV 感染症や BK ウィルス感染症、薬剤性腎障害他の合併症、がんの発生が問題となっています。最近登場した mTOR 阻害剤の Everolimus は Calcineurin 阻害剤の減量が可能で、抗ウィルス作用や抗腫瘍作用、血管平滑筋増殖抑制作用もあり、長崎大学でも移植後 2 週間で Everolimus を追加して、他剤を減量、steroid も中止するレジメを実施しており、より成績の改善が期待されます。

免疫学的ハイリスクの ABO 血液型不適合腎移植や抗 HLA 抗体陽性症例においては抗体関連拒絶反応の制御に抗 CD20 抗体 (Rituximab) や血漿交換、IVIg が重要な役割を果たしています。Rituximab は 2016 年に ABO 血液型不適合腎移植に保険適応となりましたが、抗 HLA 抗体関連拒絶反応への使用については倫理委員会の承認を得て使用しています (長崎大学)。



当院の状況と今後の取り組み

当院ではこれまで生体腎移植 54 例、献腎移植 69 例と献腎移植の方が多く稀有な施設であり、救命救急センターや脳外科の先生方のご理解により全国的に臓器提供施設の拠点でもあります。当院では 70 人が登録待機しており、移植医として今後とも臓器提供推進活動のお役にたちたいと思います。

生体腎移植については ABO 血液型不適合腎移植や抗 HLA 抗体陽性腎移植等、新しい移植や免疫抑制剤レジメについても積極的に導入していく予定です。

また腎移植の診療には移植医、内科医、薬剤師、看護師、栄養士など多職種連携が不可欠です。当院ではレシピエントコーディネーターの看護師がおり、移植に関する情報提供や生活情報の収集と患者指導を行い、移植指導管理料の算定、献腎移植施設認定の要件になっています。コーディネーターが多職種連携のかなめとなり、ますます移植が推進できるよう、各方面のご協力をお願いします。